

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	『坊ちゃん』独訳者A・スパン
Author(s)	上村, 直己
Citation	九州の日独文化交流人物誌: 131-133
Issue date	2005-02-20
Type	Book
URL	http://hdl.handle.net/2298/13514
Right	

改訂したいと考えたが、病気のためそれが出来ず第二版のままにせざるを得なかった。そのため序文も自ら筆を執ることが出来ず口述によった。短い序文の最後にシラーの格言詩「友と敵」が引用されている。

Freund und Feind

Teuer ist mir der Freund, doch auch den Feind kann ich nützen.

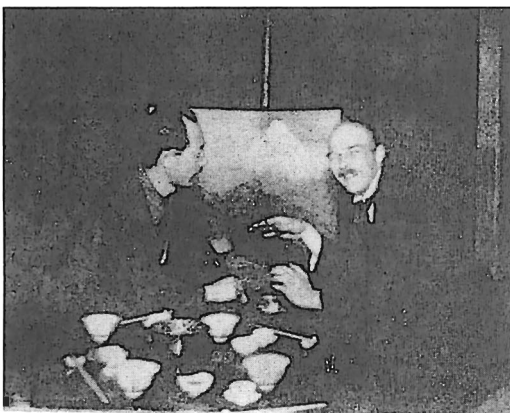
Zeigt mir der Freund, was ich kann, lehrt mich der Feind, was ich soll.

「私にとって友は大切であるが、敵も役立つものだ。友は私が何を為し得るかを教え、敵は私が何を為すべきかを教える」という意味であるが、武藤は死の間際に至ってこのシラーの詩の内容に深く共感していたことを示している。

遺族の語るところによると、彼は病床にあっても尚研究すべき幾多の問題について考えるべきこと或いは為すべきことがあって、いささかも死を自覚せず書物を放さず、臨終の数日前医師の忠告によって漸く諸資料を病室から持ち出したほどであったが、シラーの詩集だけは枕元に置かしていたという。

武藤は確かにシラーを尊敬しその作品を愛好した。又、その歴史観 Die Weltgeschichte ist das Weltgericht（歴史が裁くの意）を知ってはいたが、「*Ranke* の如き態度を以て歴史を研究し又歴史に関する著述に従事したいと思ふ」（『日英交通史之研究』改訂増補第二版自序）と述べているように、彼は事実を重んじる歴史家であった。それでシラーを扱う場合もその芸術・思想を論ずるよりも、文献的・書誌的なものになった。その際史料をして語らせる方法採ったので、夥しい引用と詳しい注釈になったと考えられる。

『坊っちゃん』独訳者 A・スパン



山本有三と対談中のスパン

アレキサンデル・スパンというドイツ人を知ったのは大正14年7月号『独逸語学雑誌』（日独書院）の巻末に出ていた独訳『坊っちゃん』の出版広告によってであった。そこに「九州帝国大学講師アレキサンデル・スパン先生訳」と付記されていた。広告には本書は「九州帝国大学に教鞭を執り日本通独逸学者として知られたるアレキサンデル・スパン先生が忠実に逐語訳せられたるもので、若い江戸っ子の闊達な気分が篇中の到る所に横溢して居る原著の趣を少しも傷つけずに、其の巧妙な描写を原著其の儘独逸語に写し出したものである」とあり、興味をそそられた。その後調

べてみると、スパンは漱石作品だけでなく、他の作家のものも色々訳していることが分かった。

九州大学医学部に保存されている履歴書によると、スパン (Alexander Spann) は1890年12月22日にハンブルクのアルトナに生まれた。だが、教育はザーレ河畔のハレ市で受けた。そのギムナジウムを卒業後、ステーベ農園で実習を受け、ハレ高等農学校に進んだ。1910年同校における2年間の学習を終えると、ステーベ農園に戻り、支配人を務めた。このようにして農業の基礎を修めたスパンは、さらにベルリン大学とハレ大学において農芸化学を学んだ。その後一時、科学雑誌の主筆を務めたが、1912年(大正1)10月に至り、一年志願兵として極東の青島に赴いた。これは彼の生涯の転機となる出来事であった。2年後にその独支大学(Deutsch-Chinesische Hochschule)の農林学科助手に就任した。独支大学は中国青年たちにドイツの学術文化の優秀生を知らせ、また彼らの知識や技術の増進を計る目的で1910年に設立されたもので法政・医学・工芸・農林の4学科があった。だが、該校におけるスパンの研究生活は日独戦争のため7カ月で終わりを告げた。即ち1914年(大正3)7月欧州で第一次世界大戦が勃発し、日本は日英同盟の約定に従いドイツに宣戦布告し、山東半島を攻撃した。スパンはこの時第三海軍歩兵大隊に属し、戦闘に参加した。ドイツ軍は膠州湾総督マイヤー・ワルデック大佐の指揮下に圧倒的兵力の日本軍に対してよく戦ったが、2カ月後降伏した。そしてワルデック大佐以下4700余名のドイツ人が捕虜になり、スパンもその中にいた。

以後彼は1914年(大正3)11月から20年(大正9)まで久留米の俘虜収容所で過ごした。この間『故郷の三国旗』(Heimatswimpel)という収容所雑誌の主筆を務め、また収容所の菜園で研究に必要な珍しい植物を栽培した。点呼の整列に遅れたなどの理由で重営倉の処罰を受けたことを示す史料もある(欧受大日記)。収容所では当初から定められた日課があり日本語が教えられたが、スパンはそれだけでなく自らも積極的に習得に努めたのではあるまいか。

日本各地に収容されていたドイツ人俘虜の中には開放後、技術や知識を活かして日本の職場に採用された者が少なくなかったが、スパンもその一人だった。彼は農業知識を見込まれて、福岡県幸袋町(現・飯塚市)の伊藤農園の顧問になった。これは九大医学部教授の久保猪之吉の紹介による。伊藤農園は炭鉱王として知られた伊藤伝右衛門が作ったもので、当時模範的農園として名高く、果樹・蔬菜の合理的栽培の研究に努めていた。

さて、スパンは1920年(大正9)10月から九州帝国大学講師として医学部の有志者に独語や独文化を教えた。翌年には農学部でドイツ農業発達史の講義を委嘱され、休講の年もあったが26年まで担当した。この間1922年(大正11)4月から山口高等学校の傭外国人教師を3年間務め、独語を教えた。

この時期の仕事で注目すべきは『Das Junge Japan』という独文雑誌を殆ど独力で発行していることだ。創刊は1924年7月で、26年6月の第2巻10号を以て廃刊するまで全21冊を出した。内容は日独の文物の紹介と理解のための記事で満たされているが、日本の近代文学の翻訳が多いのが特色だ。これは日本文化や日本人の国民性を正しく理解するには、近代文学の作品を翻訳・紹介するのが有効であるとのスパンの考え方に基づくものであった。それで翻訳に際しては日本人の心情や思考方法をよく伝える作品が選ばれた。スパンが訳したのは武者小路実篤『一休の一日』『その妹』、菊池寛『ある抗議書』(大石秀典共訳)『藤十郎の恋』(米沢直人

共訳『恩讐の彼方に』、里見弴『嫉妬』、山本有三『海彦山彦』（内山貞三郎共訳）、国木田独歩『帰去来』『親子』等である。それからスパンの訳ではないが、倉田百三『七夕祭』、芥川龍之介『虱』、樋口一葉『闇桜』、久米正雄『地藏教由来』なども訳載された。これだけ次々と近代文学作品の独訳が掲載された雑誌は他になかった。

スパンの訳業で最も有名なものは冒頭に挙げた独訳『坊っちゃん』である。1925年に大阪の共同出版社から上梓されたもので、四六判、238頁の完訳である。副題に「お人好し」(Ein reiner Tor)とある。スパンは「『坊っちゃん』を独訳して」という文章において次のように述べている。

「夏目漱石氏の坊っちゃんを訳了出版するに当たって、色々の感慨に打たれます。私が、最初これを読んだ時には、其の生彩に富み、澁刺たる独創性の横溢してある点で、明治文壇異数の作品であると思ひましたが、自ら其の後教職に就いて、日本に関する研究を積んでからは、所謂『江戸っ子気質』がこれ程巧みに生き生きと描写してあるものは殆ど他に比類を見まいと思ひます。勿論漱石氏の作品中には、より深刻なより偉大なものがあるけれども、坊っちゃんの間人本然的な、闊達にして廉直なしかも同時に優に柔しい性格は独り日本人のみではなく世界万国の人々に同感を起こすものと思はれます。…」

スパン訳は忠実な逐語訳で、原作の気分を傷つけぬように苦心が払われている。それに関してスパンは序文で、英・仏訳本はそれぞれの国民の好みに合わせて故意に自由に訳していると述べている。

スパンはその後一時、神戸鉄道病院で独語講師を務めたが、昭和2年再び九州帝国大学講師となり医学部で独語論文の校閲などの仕事をしたが、翌年には久留米の九州医学専門学校(現・久留米大学医学部)にも出講した。ここでは水泳部の部長などもやり、学生たちと親しく交わった。彼の授業はかなり自由で、よく学生たちを外に連れだし実物教育をした。翻訳の仕事はこの頃も続け、上海の独文誌『橋』(Die Brücke)に菊池『小野小町』、芥川『鼻』その他の翻訳を発表した。だが、1934年(昭和9)3月10日付けで九大講師を依願退職後の消息は杳として知れない。一説に彼はある事件のために三池港から密かに貨物船で帰国したというが、真相は不明である。

医学ドイツ語学者 磯部幸一

医学ドイツ語学者には本来は医学が専門だが、その修業過程で修得したドイツ語の方に関心が移り、むしろドイツ語学者としての功績が大きい人と、大学や外国語学校でドイツ語・ドイツ文学を専攻し、独語教師となったが、勤務校が医学専門学校であった関係上、医学ドイツ語を教える必要から、次第にその知識を深めていった人がある。前者には高橋金一郎、田中祐吉、賀川哲夫などがおり、後者には村田正太がおり、今回取り上げる久留米医科大学教授・磯部幸一がそうである。人数的には前者がずっと多い。

磯部幸一は1891年(明治24)7月生まれ。1914年(明治44)4月東京外国語学校独語科に入